北海道医歌人会詠草

同期会とクラス会

滝川　村田　英俊

クラス会の話題は同じ　どん引きをされぬ言い方　工夫はするが
同期会の　笑いのツボは　ズレていて　われの急所は外さずに突く
振りかぶり　投げた途端に　腕を垂れ蹲りけり　マウンドに友
癒えたなら　話がしたい　癒えぬなら　話しかけたい　友の難病に
級友は　アイドルオタクの　先駆にて　解りて語らん時には　他界す

冬

江別　三宅　浩次

この便り北の国から発します春待ち耐える強き心で
冬告げる手稲の山の頂に白き衣の拡がるを見ゆ
一年を春夏秋冬と決めたのは昔の人の驚くべき知恵
春でなく冬を新年にしているは現代人の情の浅さか
今朝もまた薪ストーブ焚く穏やかな温もりのあり冬また楽し

スズナ

札幌　浜島　泉

七草の粥を炊くとて宅配の　スズナとセリのセットを求む
今日冬至暮れて明かりを灯しつに　低き夕日が差し入りて来つ
冬は雪春には雪崩無意根山　緑は近め色ひて煙る
変わり目の終わりのしるし根雪来て　愁訴さまざま収まるのとき
ことのほか鮮やかなりし　童謡の歌詞音律を復してみるに

タナトス

釧路　児玉　昌彦

未来ある娘心にひそみたる希死念虜とのアンビバレンツ
日本の未来に望み託し得ぬかくも多きがＳＮＳに
人生を「ゲームオーバー」してみてもリセット叶わぬ運命と知るや
満たされぬ自由求めて皆狂う「自己実現」の毒に当たりて
「人生は生きるに値せず」とした混迷の渦・廿歳の我も

我が友、一の渡隆生（1）

北広島　古屋雅三知

山の端に釣瓶落としの陽が落ちて秋は深まり　友偲ばるる
五十年隔し今もまざまざと瞼に蘇る　友の死の夜
通報受け　しんしんと降る雪道を走る自動車のもどかしさかな
『暫し待て…』　面会出来ず　指示待ちの長き廊下の暗き灯火
待たされてやがて入りたる病室の表情の無き友の横顔

枇杷の花

函館　水関　清

波ひとつなき湖は　山々の眠り写して　澄みわたりけり
炊きたての新米の上　煮凝りは　裸電球の灯を映したり
駆け降りるセーラー服を見し車掌　走り出したる　特急停まる
結界の出入りも自由　雪虫は　浮きて吹かれて世を憚らず
芳香も甘さも秘めて　枇杷の花　今は集まり温もりてをり

爽籟

士別　竹内　幹夫

燃える赤為手は吹きゆく秋の風　裾濃に染めて白鳥を呼ぶ
訪へど黄檗桑染黙しゐる　夢見がちなる爽籟の杜
吹く風が葉裏を見せて戦ぐ時　亡き人々の面影見ゆる
風太く天地の樹々を鳴らす時　雪を予感し山身震いす
おじいちゃんかけっこ見てねやくそくよ　配信の空東京も秋